

レファレンス コーナー 中国の農業・農村・ 農民―最近の資料

河田重隆

高度成長を続ける中国では、急速な経済発展の一方で、農業と農村を犠牲にした工業化や都市化はもはや限界に達している。都市と農村の収入格差は依然として拡大しており、農民は過重な経済的負担（雑費用の徴収も多い）に喘いでいる。近年農民による抗議行動や暴動が多発し、日本でも一部が報道された。出稼ぎによる耕作の放棄と農地の荒廃、農地の収用で土地を失った多数の農民、膨大な農村余剰労働力の就労問題、最低生活保障や医療の立ち後れなど、中国の農村問題は実に深刻である。「調和のとれた社会」の構築を目指す胡錦濤政権は、「三農（農業・農村・農民）問題」対策を最優先課題とし、さまざまな対応を迫られている。ここでは、中国の農業・農村・農民に関する最近の日本語の図書、当館の蔵書から紹介したい。

非常に役立つ概説書に、白石和良著『農業・農村から見る現代中国事情』（家の光協会 二〇〇五年）が

ある。本書は農地の所有者、農業の機械化、農産物の生産、都市と農村を峻別する戸籍制度、農村の社会保障制度や義務教育、農民の所得向上のための政策などのほか、人口・食糧・環境問題を含む三五の疑問について詳しく解説している。

三農問題を体系的にまとめた嚴善平著『農民国家の課題』シリーズ現代中国経済2（名古屋大学出版会 二〇〇二年）は、過去五〇年間の三農問題の実態や政策的背景を分析している。農地の所有関係と農業の経営方式、都市と農村の二重構造を支える戸籍制度、農村・都市間の所得格差と消費格差、国家と農民の支配・従属関係の変容、村民自治の制度と実態、郷鎮企業、農村労働力の地域間移動、食糧問題、農産物貿易の実態とWTO加盟の影響などを扱う。巻末に三農問題の基本文献が紹介されている。

農村実態調査に基づく研究成果として、中兼和津次編著『中国農村経済と社会の変動―雲南省石林県のケース・スタディ』（御茶の水書房 二〇〇二年）は、中国における改革開放と市場化が調査村の経済と社会にもたらした変化の実態を、多面的に解明している。末端行政幹部から見た統治構造や農民の意識（市場意識、社会・経済意識、経営意識、政治意識）も取り上げられる。調査は一九九五年と一九九八年に行われ、同一村の同一家族を追跡調査している。

田島俊雄編『構造調整下の中国農村経済』（東京大学出版会 二〇〇五年）は、一九九〇年代初頭と二一世紀初頭に実施された日中共同農家調査の成果であり、同一農家のパネルデータに依拠している。二次調査では、山東省、陝西省、湖南省、貴州省、四川省、安徽省の七県級行政区の農家六〇三世帯が対象になっている。就業構造、就業行動、所得、教育、地方財政などが分析されるが、この十年間の農村内の格差拡大と広範な離農に見られる構造変動は、著者らの「予想を上回る大きなものであった」という。

農外就業の機会に恵まれた沿海の大都市近郊農村であっても、必ずしも経済状態が良くなっているわけではない。石田浩編著『中国農村の構造変動と「三農問題」―上海近郊農村実態調査分析』（晃洋書房 二〇〇五年）は、一九八〇年代末と二〇〇〇年初めに実施した調査からこの点を明らかにする。改革開放後の市場経済化と企業間競争の激化で、経営条件の悪い郷鎮企業や国有企業が相次いで倒産した。内陸農村出身の出稼ぎ工との職の奪い合いもあって、失業した農民の再就職は容易なことではない。不安定就業の昂進は調査村が抱える大きな問題である。

張玉林著『転換期の中国国家と農民（一九七八―一九九八）』（農林統計協会 二〇〇一年）は、体制転換期における国家、基層幹部（農村地域の幹部）と農民の関係について考

察し、収奪と抵抗の実態を解明している。各章は、農民の「死と暴動」の原因である農民負担の問題のほか、農村改革、農民の都市流入、戸籍制度、村民自治を扱う。巻末の付録「国家・農民関係年表」、「一九〇年代における農民暴動事件」はかほ有用な資料である。

王文亮著『九億農民の福祉―現代中国の差別と貧困』（中国書店 二〇〇四年）は、三農問題と深く関連している農村の社会保障と福祉を体系的に論じ、都市・農村の二重社会構造を克服した全国統一の社会保障システムの必要性を強調している。

中国では、人口高齢化の波が農村部にも押し寄せているが、本書は、伝統的な「家族養老」の衰退とそれ起因する農村高齢者の扶養問題についても詳述している。

最後に紹介する石田浩著『貧困と出稼ぎ―中国「西部大開発」の課題』（晃洋書房 二〇〇三年）は、荒廃が進む内陸農村（四川省成都市と重慶市）の貧困構造と出稼ぎの実情について、五年に及ぶ農村実態調査に基づいて考察している。内陸農村に活路はあるのだろうか。著者は「皮肉だが」と断りつつ、出稼ぎの進行で段階的に内陸農村を「自然死」させることが、「最も現実的な施策であり、内陸農村に対する最良の対症療法的政策といえるのかもしれない」と本書を結んでいる。

（かわだ しげたか／アジア経済研究所図書館）